

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

梅

平成28年3月第1週放送

住む場所や時代の違いはあっても、寒い冬、春の訪れを待ち焦がれる気持ちは変わらないものです。

永平寺を開かれた道元禅師も、京都から雪深い越前の地（今の福井県）に移られてからは、春の訪れを強く待ち焦がれていたようです。

1メートル近くも降り積もった雪を目の前にして書かれた、『正法眼蔵』「梅花」の巻には、かつてのお師匠様である如浄禅師によって示された漢詩が、深い感慨と共に引かれています。

「元正 祚をひらき、万物ことごとく新たなり。

伏しておもみれば、大衆、梅は早春を開く」

（年も改まり、新たな幸いを迎えた。周囲のあらゆる物が新しい顔を覗かせている。諸君、梅の花が早春を連れてきたようだ。）

普通は、春になると梅の花が咲くものだと考えますが、ここでは違います。梅の花が春を連れてくるのだと言います。私たちの発想とは逆になっています。

梅の蕾である修行僧たちが、仏様のお悟りの世界である梅の花を咲かせますよという、辛い修行を行う修行僧たちへの如浄禅師の激励の言葉なのです。

私たちの身の回りでは、日々冬のように辛く、苦しいことが渦巻いています。そしていつかそれらが過ぎ去って、春のような暖かく、うららかで、落ち着いた日々がやってくることを心ひそかに待ち望んでいます。

でも、ここで先の漢詩を思い出してみてください。春が梅の花を咲かせるのではなく、梅の花が春を連れてくるのだということ。そして忘れてならないのは、春という季節は、冬を経て初めてやって来るのだということです。冬のごとく、辛く、苦しい時期を経て、初めて枝に梅の蕾をふくらませ、やがて花を咲かせます。気が付けば、そこにはいつの間にか春は訪れているのです。

道元禅師は、「世の中のあらゆる春は、梅の花のはたらきのほんの一部に過ぎない」とおっしゃっています。

あなたの咲かせた梅の花は、周囲の様々なものを次々に春へと変えていく力を備えているはず。今、目の前に立ちはだかるハードルの一つひとつに、梅の蕾が隠されていると受けとめることもできるでしょう。

— 終 —